

Title	Colman J. Majchrzak, A brief history of Bonaventurianism
Sub Title	
Author	坂口, 昂吉(Sakaguchi, Kokichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.2 (1959. 7) ,p.110(238)- 112(240)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19590700-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

淀川區花川南町）で十月十八日午前一時頃調饌の後に行われる『無言の神事』は燈火を消し神前のみで氏子總代の御手長による献饌、默讀の祝詞奏上、忍び手（無音）の拍手で、この祭りの途中で精進の御膳のシラムシ（オコロ）だけは一樣お替りを行う、これは現人神としての信仰の残っているものと考えられる。

又、西淀川區野里町の住吉神社の一月二十日（もと正月廿四）の『一夜官女』の神事は氏子中より兩親揃の十歳前の娘七人を選び、神社傳來の御膳に神饌を造り、官女の娘は修祓の後に、兩親と『別れの盃』を交して、奏樂の内に神社に参向し、父親は侍として、母親は附添としてこれに隨い、調理の精進の御膳と共に官女を一の宮に供え、二の膳以下は魚類を用いる。この官女は所謂人身御供の遺風と云われている。本書所載の文化五年の『御供一件記』はこれ等のこときを知る貴重な史料である。また寛政五年五月に堺浦の漁師が『禁裏御用達』の美名を悪用して、組合五ヶ村の攝津浦に入込漁を申し出で、爭論となつたが、代官所も禁裏御用には齒が立えず、五ヶ村は不合理のまゝ承諾せられた。これに類することは終戦までよくあつたことを思い出した。

堺市出島町芦原町の漁民の『海月退治の祈禱』は住吉神社神供漁場の海月を退治する爲めに、住吉大社第一本殿の御神座下の砂を漁場に撒く行事で、その神威は顯著で不思議にも海月は見えなくなると傳えられている。また出島町に行われる住吉大社に奉納の鯨蹄は鎌倉時代に灣内に迷い込んだ鯨を取り逃した殘念會の遺

事で、毎年夏に行つたが中繼し、最近では昭和二十九年に復活した。これは造り物の鯨を「大鯨」の幟をたてた五艘の船が車に引かれてこれを追い、船中には鉛打の少年五人宛が分乗し、踊り乍ら大社へ参詣するので、鯨の製作費も當時四五十萬圓を要したと云う。

次に史料篇は研究篇使用のもの、其他を合せて慶長十八年より明治三年まで、長短の文書記録約一百七十點を收録し、事項別、年代別の索引が附録してある。（四、〇〇頁）

本書はさきに著者の刊行の『近世漁村史料の研究』の姉妹篇で、漁村の社會史、經濟史方向の研究家に必讀を推奨する。終りに著者が昭和二十四年以來、大著約十冊を學界に送られた筆勞に深甚の敬意を表するものである。（武田勝藏）

Colman J. Majchrzak;
A Brief History of Bonaventurianism
104pp. 1957 Washington

本書は、ワシントンのカトリック大學に博士論文の一部として提出されたものである。著者の意圖は、ボナヴェントーラの哲學及び自然神學が、この思想家の在世時代である十三世紀から現在にいたるまで、いかに継承せられてきたかを追求することにある。近年スコラ學の史的研究の中で、トマス、スコトゥス、オッカムらなどならんで、ボナヴェントーラに對する關心はますます深

まりつづねる。その理由は、個人或は人類を流動的歴史的な状態においてといふべく、うつろいゆく自然的所與の中に超自然的な眞理の漸進的な投影をみよとするボナヴォントゥーラの教説が、全く世俗化された世界にあえぐ現代人にとつて大きな魅力であるかのところよう。だがそのため、我々はややすれば、七世紀の時のくだりをとびこえて、彼の思想のもつ永遠の魅力にみせられ、中世末から近代にかけてそれがもつた歴史的意義の研究をおそかにあるおそれなしとする。實際彼の思想的影響をたどりた研究は極めて少く、H. Spettmann, M. Grabmann, E. Gilson などが、十三世紀末アンチ・ムーバの線で結集したアルラスのコースタキウス、ショーン・ペッカム、アクアスパルタのマテウスなども扱つたものが主であつてゐる。十四世紀以降について

は、Édouard d'Alençon, Prosper de Martigné, Évangéliste de Saint-Beat などの著書の中にも簡単によれたのみで、殆ど無視されてゐる。この研究のおくれば、回つて十三世紀の代表的スクロ学派であるトマスの學説の繼承が、M. Grabmann によって克明にだれられてゐるとの對照的である。そのような意味から、本書はなお詮論的域をでないものであるとせよ、創始的意義をもつものとらへよ。

論面の構成は七章からなり、第一章においてはボナヴォントゥーラ自身の思想的背景及びその哲學の一般的特徴を明かにする。ひんやり著者なりの方面的最新の研究成果を充分吸收し、これを簡

潔明瞭に叙述している。

第一章においては、十三世紀より現在にいたるまでのフランススコ會、コメヴォントゥアール會、カプーチン會の會憲、及び歷代教皇の教書の中で、ボナヴェントゥーラの言及を枚舉していく。これは著者のいうようにボナヴォントゥーラの思想的影響をやさしくに一つの有効な方法であると考へられる。會憲の吟味においては、各時代を通じ、ボナヴォントゥーラ學派の存在を明示するような條項は極めて少く、わずかにカプーチン會の千六百三十八年、千九百九年の會憲にそれがみられるにすぎない。しかし明示的にせよ、暗示的にせよ、ボナヴェントゥーラ研究の必要を説く條項が、千五百年以來のすべての會憲にみいわれてゐる。また諸教皇の教書については、從來よく知られてゐる Sixtus IV (1482), Sixtus V (1588), Leo XIII (1885) の教書のかか、Pius V (1568), Innocent XII (1694), Pius X (1904), Benedict XV (1921), Pius XI (1922, 1924) の教書が枚舉されてゐる。それらの中でも、諸教皇が、ボナヴォントゥーラの人格と教説をトマスと並びて稱揚し、その作品を研究する必要を力説してきたことが確証される。

ウーラ的傾向があつただけだと主張する。そしてこの傾向は十三世紀後半、スコトウスの説が有力になるまで最も顯著であつたが、

がかりにして、ボナヴェントゥーラの思想史的影響をさらに廣くかつ深く追求すべきであらう。

(坂口昂吉)

後はそれにとって代わられた。けれどもフランスコ會學派に對するボナヴェントゥーラの影響は、なお現在にいたるまでかなり大きかったのであって、その點では從來過少評價されていた感がある。ことに十六世紀に、ローマで最初の全集がでたこと、及びスペインのカラタユド出身の學者 Peter Trigos がトマスとボナヴェントゥーラを共に稱揚し兩者の融和をはかったことから、

十七世紀には Bartholomew de Barberis を中心にしてボナヴェントゥーラ復興がおこなっている點がとりあげられる。またこの運動の中核がカプーチン會士であったことに注意すべきである。だがボナヴェントゥーラへの眞の關心の復興がおこったのは、千八百八十二年から千九百一年にかけての批判版全集がクアラッキから發行されて以後であると著者は結論している。

とくに本書の功績といえることは、十四世紀以降の今までとりあげられなかつたボナヴェントゥーラ研究者の名前を列舉したことであろう。ただその各々についての分析があまりに簡単なので、叙述がやや平板に流れているきらいがある。またその視野をあまり厳密に哲學と自然神學に限つたため、ドイツ神祕主義或はジエルソンヘボナヴェントゥーラが及ぼした影響に言及できなかつたのも殘念である。しかしこれらの點はなお今後の課題として残さるべかであり、われわれは本書の先驅的な意義を認め、これを手

彙報

昭和三十三年度史學科秋季見學旅行記

十月十三日（火）午前七時三十分米原驛集合。前夜東京を發つた者が半數で、先發して北陸路から、京阪から驅けつけた者もいて、一行は指導の伊木・淺子兩先生、高橋副手、及び學生を合せて計十三名。久し振に小人數である。北陸本線高月驛から渡岸寺の觀音堂へと足を運ぶ。

そこで本尊十一面觀音像を拜観。像は高さ六尺四寸三分の木造の立像で、正面を除く十面・耳璫・瓔珞以外はすべて一木で彫られてゐる。僅かに腰を左にひねつて右脚を少々前に踏み出し、左手で軽く水瓶をとり、右手を下に長く垂れた姿態は奈良法華寺の十一面觀音像に似通うものがあるが、殊によく引締つた顔や體の張りの強さと天衣等に見られる彫法の銳さはすばらしい。他に類例を見ない耳璫・頭上の十面の特殊な配置からも平安初期木造彫刻の勃興期に際して大陸の作風の日本化されんとする過渡期の作品と考えられる。臺座と光背は失われてゐるが、此の度臺座と須彌壇が新調された。本尊の左右には阿彌陀如來、大日如來の一體